

教育長だより No. 30

2023年2月10日

なんでわからんの？

～ 憤(いきどお)る前に知る『子どもの認知特性 3タイプ』～

過日の新聞（H27年11月4日：朝日）に『その勉強法、うちの子向き？』という記事がありました。8年前の『ほほえみ通信』にそれを紹介しました。今回はそのリニューアル版です。

「漢字を間違える、九九が覚えられない。そんな子どもの勉強を見ていて、もどかしくなった経験はありませんか？」・・・こんな書き出しで始まる保護者向けの特集です。以下にその概要を紹介します。

小児神経専門医の本田真美さんによると、人は見る力や聞く力など、生まれつき持っている感覚の強弱により得意な学び型に違いがあるそうです。これを『認知特性』と言います。物事を理解したり記憶したりする方法のことです。そして、これには**大きく3つのタイプ**があるとのこと。①**言語優位**：文字や文を読み、頭の中で映像化して考えるのが得意なタイプ。②**視覚優位**：見たものをカメラのように記憶するタイプ。③**聴覚優位**：言葉などを音声として取り入れるタイプ。例えば、視覚優位の子には、「 $2 \times 3 = 6$ 、 $2 \times 4 = 8$ 、・・・」という数字だけを見て九九を覚えるよりも、四角のタイルが増えていく図が描かれた九九カードの方が理解しやすいこともあります。

ところが、学校の授業は基本的に「話す」「聞く」が中心です。先生も話すのが得意な人が多いですよ。そこで、先生自身も「子どもは話（説明）を聞けば理解できる。」と思っている場合が多いです。そして、先生自身も言語優位の学習の中で育っていますから、「にさんが6、にしが8、・・・」などという九九のまる覚え（暗唱）が苦手な子の気持ちが理解しにくいと思います。残念ながら、これまでの学校現場ではこうした認知特性がほとんど配慮されてこなかったからです。

しかし、特別支援教育が進むにつれ、「視覚支援」という言葉がよく言われるようになりました。特別支援教育の中で子どもの認知特性が研究され、「視覚優位」のタイプの子には絵や写真、算数タイルなどの具体物を使った学習が効果的であることがわかりました。みなさんの学校にも巡回相談の先生が来られて「視覚支援」の重要性をお話くださっていますよね。また、特別支援教育を毎年校内研修に取り上げ、その積み上げを進めておられると思います。（例えば、教室の前面の掲示物をなくすのも、こうした視覚優位の子が混乱しないためですよ。学校訪問で教室を見せていただくと、担任の先生が特別支援教育の視点をしっかり持っておられるのがよくわかります。）

新聞記事には具体的な教材も載っています。漢字学習では、『読み書きが苦手な子どもへの〈漢字〉支援ワーク』（明治図書）。形や部首に注目した「漢字パーツ」や部首に注目した「漢字たしざん」といった練習法がとり入れられています。また、国語の助詞の理解に役立つのが全国聴覚障害教職員協議会のドリル『みるみる日本語 みるくとするみの大ぼうけん』です。（ホームページ参照）これは読み書きの苦手な子だけでなく、日本語が母語ではない子の学習にも効果的だそうです。（詳しくは図書館などで新聞記事をご覧ください。）